



Title	刀剣鑑賞のはじまりについて：北野天神縁起弘安本系諸本の図様から
Author(s)	齋藤，風伯
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

刀剣鑑賞のはじまりについて

—北野天神縁起弘安本系諸本の図様から—

日本東洋美術史 博士前期課程2年

齋藤 風伯

はじめに

本発表は、日本刀の鑑賞文化について、天神縁起の絵画作例にみられる刀を鑑賞する図様の成立時期を検討することで、鑑賞文化の開始時期が鎌倉中期（13世紀）以前に遡ることを明らかにするものである。

日本刀には、真贋や作者の同定を行う鑑定と共に、作品の美的価値を味わう鑑賞の文化が存在する。作風の看取を行う点は共通しながら、その目的は大きく異なる。注目する箇所は大別三つ、姿（刀身のプロポーション）、地肌（鍛錬の工程によって鋼に生じる木目のような模様）、刃文（刃が描く模様の形状）である。外装などの装飾ではなく、実用武器の鋼の刀身そのものを鑑賞対象とする文化は、世界的にも類を見ない日本刀独自のもので、その成立時期を正しく把握することは重要である。

第1章 先行研究と発表の目的

従来の研究において、刀剣鑑賞のはじまりは14世紀初めのこととされてきた¹。

根拠は主に二つあり、一つは刀剣鑑定の専門書が出現した時期である。現存する最古の刀剣書は『銘尽（龍造寺本）』（佐賀県立図書館所蔵、観応二年（1351）書写）で、それに次いで古いのが、『銘尽（観智院本）』（国立国会図書館所蔵、応永三十年（1423）書写）である。正安年間（1299～1302）や正和五年（1316）を起算年とする記述が散見されることから、書写の元となった原本の成立は、共に14世紀初めと理解されている²。これら初期の刀剣書の内容は、鑑定が主な目的だが、作品の美しさを形容する作風描写も見られ³、美的価値を味わう鑑賞も行われていたと見なされている。

いま一つは、応長元年（1311）成立の絵画作例「松崎天神縁起絵巻」（防府天満宮所蔵、以下「松崎本」）巻第五第四段「姉妹利生」の場面⁴に、姉を娶った国司が、太刀を

¹ 酒井元樹「刀剣鑑賞の歴史」、『刀剣鑑賞の歴史』、東京国立博物館、2017年、40-47頁

² 吉原弘道「重要文化財「銘尽（観智院本）」の復元とその性格—中世刀剣書の祖型をめぐって—」、九州産業大学『基礎教育センター研究紀要』第一号、2011年

³ 『銘尽（観智院本）』「古今諸国鍛冶之銘」の段に次の記述がある。＊下線、注記は発表者
中次郎くにまさとめいをうつ事まれなり（中略）はゞきみしかくはゞきもと六七寸より
もそりてすゑすこしすくにてすかたうつくしく（＝姿美しく）しろくねはきなり（後略）

⁴ 場面の呼称は研究者によって異なるが、本稿では、須賀みほ氏の論考内で用いられる名称を採用した。

片手にくつろぐ様子が描かれることである。この図様が、刀剣鑑賞を行う様子を描いた初例として、刀剣研究上多く言及されてきた⁵。自邸でくつろいでいる場面設定、自分の佩刀を眺めていると思われる描写から、目利きを行っているとは考えがたく、発表者もこれが刀剣鑑賞を行っている様子との理解に賛同している。先行研究では、作品の制作時期と図様の成立時期に差があることは想定していないようである。

しかし、絵画作例において、制作時期より大きく遡る時期に成立した図様が採用されることは少なくない。実際「松崎本」は、松崎天神の由緒を語る絵巻だが、その物語の大半が、天神信仰の総本社、北野天満宮の成立譚を語る、北野天神縁起のものを継承している。北野天神縁起は社寺縁起の中でも特に多く制作されており、絵と詞書きに複数の系統が存在する。「松崎本」は、特に「北野天神縁起絵巻（弘安本）」（北野天満宮ほかに分蔵、弘安元年（1278）成立。以下「弘安本」）に依拠する、弘安本系と呼称される類型に位置づけられる。また、当該場面の詞書きの内容⁶は、天神の利生（利益）によって国司の妻となり繁栄したことなどを述べるのみで、絵の内容ほど細部にわたる記述はない。国司が行っている刀剣鑑賞も含めた場面の描写のほとんどは、物語が絵画化される際に、制作者周辺によって作り出されたものと思われる。他の系統の天神縁起においては、夫婦が食事する様子が描かれるものが多く、国司が刀を手にする図様は弘安本系とその影響を受けた作例に固有のものである。

そこで本発表では、北野天神縁起弘安本系諸本を取り上げて、「刀剣鑑賞を行う男性」の図様の成立時期の解明、図様の成立背景の考察を行い、刀剣鑑賞の開始時期について検討を加えることを目指す。

第2章 「松崎本」の図様

まず、「松崎本」の当該場面に描かれている内容を確認する。画面右端には、霞の向こうに築地塀があり、内側には屋敷が広がる。画面の左右では、荷ほどきや食事の用意が行われる。主役となる画面中央には、屋敷内でくつろぐ国司夫妻の様子が描かれる。部屋の左側に、畳の上にあぐらをかいて座る国司、その右奥に布団に横になる国司の妻が、手前側には火炉と盥を囲んで侍従と思われる女性が3名描かれる。その脇には青磁の酒瓶2つと銚子が置かれている。国司の男性は、脱いだ上着の上に座り、右手に抜き身の太刀の柄を執って、刀身の先を左の袖で受けて構える。男性の視線は左手で受けた部分よりもさらに先の辺りをのぞき込む。抜き払った鞘は左膝に横たえている。妻は背中より下は布団に入った状態で、

須賀みほ「弘安本北野天神縁起絵巻再考—系統諸本の考察から—」、『美術史』146号、1999年

⁵ 内藤直子「日本の刀剣・刀装具」、『金属』、エルメス財団、2025年、217-236頁など

⁶ 天神の利生方便によりてこの女大国受領の北方となりて子孫繁昌し家門栄耀にほこりて父母の至孝思ひのことくにとけ堂塔をつくり仏事法事をいとなみて後には発心出家して往生極楽の本意をとけてけり

*小松茂美『続日本絵巻大成 16 松崎天神縁起』（中央公論社、1983）の詞書釈文より

文をしたためている。

「松崎本」は、松崎天神の成立譚としてアレンジされているため、「弘安本」や他の天神縁起にない場面を有しつつも、その他の場面は「弘安本」の絵を忠実に模写することが指摘されている⁷。つまり「松崎本」は、多くの場面において制作時期以前の図様を用いている。本発表で問題になる「姉妹利生」の場面についても、「松崎本」が「弘安本」を写していれば、図様の成立時期は13世紀後半に遡ることとなる。

しかし、残念ながら「弘安本」は現状多くの場面の絵と詞書きを欠失しており、当該場面の絵も失われている。同場面の詞書きは現存するため、絵も制作されたはずであるものの、採用された図様を「弘安本」に直接あたって確認することは現状不可能ということになる。「弘安本」の図様の弘安本系諸本への継承については、須賀みほ氏をはじめとする先学によって詳細な研究が行われてきたが⁸、「弘安本」が欠失する本場面は、その考察の対象となつてこなかった。そこで、次章では弘安本系の他の作例を確認することで、「弘安本」の「姉妹利生」場面の図様を復元的に考察する。

第3章 弘安本系諸本と「建治本」

「弘安本」は高い規範性を有したらしく、天神縁起諸系統の中でも作例が多い。代表的なものとして、「北野天神縁起絵巻」(根津美術館所蔵、14世紀末～15世紀前半成立。以下「根津本」)、「北野天神縁起絵巻(六巻本)」(皇居三の丸尚蔵館所蔵、15世紀成立。以下「宮内庁六巻本」)、「紙本著色天神縁起絵巻」(佐太天神宮所蔵、文安元年(1444)成立。以下「佐太文安本」)などがある。特に「根津本」と「宮内庁六巻本」は「弘安本」をある程度忠実に写す⁹。これら三つの作例の「姉妹利生」の場面を確認すると、彩色や細部に違いはあるものの、屋敷の構造、人物の位置や仕草、食事の用意が進む中で団欒する場面設定など、ほとんどの要素が「松崎本」と共通している。国司が太刀を手に執り眺める図様も、全ての作例で確認できる。このことから、現存しない「弘安本」の当該場面も、これら弘安本系の作例と同様の図様であったと考えてまず間違いないだろう。つまり、刀剣鑑賞を行う男性の図様の成立は、少なくとも1278年に遡ることになる。

加えて問題になるのは、「弘安本」の図様も他の作例に依拠している可能性である。「弘安本」は、「正嘉本」と通称される現存しない作例(正嘉二年(1258)成立か)や、「北野天神縁起」零本(身延文庫所蔵、寛正四年(1463)書写。以下「身延文庫本」)の原本(嘉禎三年(1237)成立か)の系譜にあることが指摘されている¹⁰。「身延文庫本」の現状から、その原本が絵と詞書き両方を備える作例であったか判断することはできな

⁷ 前掲註4

⁸ 前掲註4など

⁹ 前掲註4

¹⁰ 井並林太郎、「北野天神縁起絵巻(弘安本)」解説文、京都国立博物館『特別展 北野天神』、2026年、273頁

いが、「正嘉本」には、詞書きと絵が揃う写本が現存する。「北野天神縁起絵巻（建治本）」（大部分が和泉市久保惣記念美術館所蔵、建治三年（1277）成立か。以下「建治本」）である。「建治本」も現状多くの場面を欠失するが、幸い「姉妹利生」の場面は現存する。これを確認すると、「松崎本」など弘安本系の諸作例と比較して、場面を構成する要素が非常に簡略ではあるものの、基本的には同じ場面が描かれている。刀を眺める国司も、ほぼ同図様である。「正嘉本」が絵を有したか否か厳密には不明だが、「建治本」と近い図様の絵が備わっていた可能性は十分にある。そうした場合、刀剣鑑賞の図様の成立時期は 1250 年代まで遡ることとなる。

第 4 章 背景の考察

図様の成立時期が 13 世紀半ばから後半に遡ることが明らかになったが、その成立背景は依然不明である。天神縁起弘安本系の、「姉妹利生」場面において、刀剣鑑賞を行う男性の図様は、先に触れたように詞書きの内容に依拠する訳ではない。

ここで参考になるのが、大分県佐知遺跡一七号遺構の出土品である。これは鎌倉時代（13 世紀）の開発領主が葬られた遺構であり、46 点の出土品の中に、中国龍泉窯製の青磁椀 2 点や太刀、短刀が含まれている¹¹。「姉妹利生」の場面でも、象嵌もしくは彫刻によって文様を表した高麗青磁らしき酒瓶が描かれているが、器物の様子は詞書きには一切言及されていない。絵師や注文主は、詞書きを絵画化する上での不足部分を、こうした領主階級の武家の実生活に取材するなどして補い、図様を作り出したものと思われる。このことから推し量るに、国司（＝高位の武家）が刀剣鑑賞を行う様子を描く図様も、ある程度の根拠があって描かれたものと考えるのが自然であろう。そうした場合、実際の鑑賞がどれほど一般的だったかは不明ながら、高位の武家の中には刀剣鑑賞を行う者がいるらしいとの理解が、ある程度当時の社会において広まっていたものと思われる。加えて、実際に刀剣鑑賞が行われるようになってから、物語上特別刀剣に関わりがない絵巻の図様に採用される程に一般化するまでには、それなりの時間を要したはずである。刀剣鑑賞の文化の芽生えは、現時点で判明する図様の成立時期（13 世紀半ば～後半）よりもさらに遡る時期に起きていた可能性が高い。

おわりに

以上、本発表では、北野天神縁起弘安本系諸本にみられる、刀剣鑑賞を行う男性の図様は、「正嘉本」が絵を有する作例であった場合は 13 世紀半ば、そうでなく「弘安本」において成立したものであっても、13 世紀後半までには成立していたことが判明した。また、詞書きの不足を補い、実際の武家の生活に取材して図様が成立したと思われることを指摘、刀剣鑑賞文化の萌芽は更に早い時期にあった可能性を提示した。

¹¹ 『佐知遺跡 一般国道 212 号佐知バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（大分県文化財調査報告書 第 81 輯、1989）